

原 布施はるか

監 huracan

監修 ルネ

# 巨乳の母娘催眠





B:102cm  
W:62cm  
H:96cm

### ディネリンド

自らを魔女だと名乗る、謎多き女性。奔放な性格だが胡散臭く、裏心ありきの表情を隠そうともしない。エルフとは違う種族〈ニンゲン〉に関する知識を持ち合わせているようだ……？

B:90cm  
W:59cm  
H:87cm

### ナルルース＝ ルインヘン

プライドが高く忠義に厚いダークエルフの女性。ハイエルフとは対立していたが、エフィルデイスの治世で種族関係が改善され、友好の証として「女王の守護騎士」に任命された。

B:106cm  
W:62cm  
H:93cm

### エフィルデイス＝ アグラリエル

アグラリエル王国を治める女王にしてアルミアの母。異なるエルフ間の争いを止め、国を繁栄させた第一人者である。功績を尊にかけず、民のため治世を行う名君として広く知られている。

B:93cm  
W:59cm  
H:84cm

### アルミア＝ アグラリエル

アグラリエル王国の姫であり、現女王エフィルデイスのひとり娘のハイエルフ。名君と名高い母親を持つ重圧からか自他ともに厳しく、そのため他者からは高慢と誤解されることも多い。



# 巨乳エルフ母娘僕娘

ふちばら文庫

著 布施はるか 画 huracan 原作 ルネ

**インザカル**  
 耳が聞いてとを理由に捨てられた  
 (エンガン)。抱かれたはぐれエルフ  
 の村でも、異国の存在と去りては八分  
 にされていたために出陣。誰も寄り  
 つかない森で異国に生きています。

**プロローグ エルフの王国**

第二章 エルフの王国……………5

第三章 復讐の始まり……………31

第四章 復讐の宴……………71

第五章 欲望のままに……………103

第六章 インターミッション……………142

エピソード 新しいステージへ……………179

エピソード 支配者の愉悦……………218

エピソード……………249

**プロローグ エルフの王国**

四方を険しい山脈に囲まれ、深く広大な森にいたれた「アグラーリエル王国」。  
 そこは、現女王エイルデイスを首め、代々女性のハイエルフによって統治されている  
 エルフの国である。魔力の強さと純度で指図を定められたハイエルフ達が行う施政は、周  
 辺国への影響も大きく、世界の中心地のひとつと言っても過言ではない。  
 とはいえ、アグラーリエルは「伝説の土地」でもあった。  
 なぜなら王国は、厳格な純血主義のもと、険しい山脈や深く広大な森と結界との相乗効  
 果によって、外部の者……すなわち異種族の侵入を拒んできたからだ。交易と交流は  
 厳しく管理され、王国内外に足を踏み入れることのできる異種族は皆無に等しい。にもか  
 がらず、周辺国へ影響を及ぼすため「伝説の王国」と呼ばれているのである。  
 加えて、エルフ族が不老不死ともいえるほど長命種なことも理由のひとつである。  
 そんなアグラーリエル王国の深部にある森のなか、清らかな水が湧く泉の畔に、三人のエ  
 ルフの姿があった。  
 「女王陛下、お手をどうぞ。姫様も、足もとにお氣をつけください」  
 軽装アーマーを着けた褐色肌の女騎士が、高貴な装束の女性ふたりへ手を差し伸べる。

「ええ、ありがどう。ナルは、とても氣がつくわね」  
 「ありがどう、ナルリス。わたしは、大丈夫です」  
 「これも騎士の務めですから」  
 職務に忠実な褐色肌の女騎士は、ダークエルフのナルリスとルインヘン。近衛隊長  
 にして、女王と王女の守護騎士である。ダークエルフは、魔力こそハイエルフに劣るもの  
 の、代わりにエルフ族としては思えた筋力と体力を持ち、身体能力に優れている。かつ  
 てはハイエルフと対立していたが、今は関係が改善され、互好の証として多くのダークエ  
 ルフが近衛の任を委ねられていた。ナルリスは、その頂点に立つ騎士だ。  
 そして、ナルリスが守護する女王と王女が、今、彼女の目の前にいるふたりだった。  
 「アルミアもナルも、ここへ来るのは初めてだったからわね。女王エイルデイスとアグ  
 ラリエルである。不治の病で急逝した先代の娘として数百年前、女王の座へと就いて以降、  
 王国をより豊かに繁栄させた人物だ。ハイエルフとダークエルフの争いを収め、ナルリス  
 を近衛隊長としたのも彼女であった。エイルデイス本人は、そういつた功績を慕に  
 かけることなく、民のための治世を行い、名君として慕われている。  
 「このように神聖な場所に」二階建ての「玉に殿ね。私達はもう、家族のようなものには……」  
 「もう……。その堅苦しさだけは玉に殿ね。私達はず、家族のようなものには……」

「その言葉だけで光栄です。ありがどうございませす」  
 「本当に変わらないんだから……。いいわ。とにかく先に説明をしておきましょうか」  
 エイルデイスは頑固者の守護騎士へ柔らかに微笑み、言葉を続けた。  
 「ここは、王族と、一部のハイエルフしか知らない「聖なる森」の精気が清らかな水  
 に宿り、私達に魔力をもたらし、術を施してくれる場所よ。アルミアも成長して、私から  
 この聖なる地への場所を伝えられること、とても嬉しく思います」  
 ひとり娘のアルミアが「はい」と意気込む。  
 高潔な王族であることに誇りを持つハイエルフの姫、アルミアとアグラーリエル。右君の  
 崇れ高い母を継ぐ者としての重圧から自他ともに厳しく、時には「生意気」とか「王族  
 の高慢さ」と受け取られてしまう部分もある。また、母とは違って魔法よりも剣に興味を  
 持ち、守護騎士ナルリスに師事していた。それ故、幼い頃からナルリスを姉のように  
 慕いつつも王女として振る舞う。素直で生真面目な娘でもあった。  
 ナルリスも、自分の立場をわきまなければと自訓しつつ、アルミアを妹のように大  
 事に乗っている。エイルデイスが「家族のようなもの」と口にしたのも道理だろう。  
 エイルデイスは、なおも言う。  
 「ナルリス、あなた達ダークエルフにも、この泉のことを知ってほしかった。ようやく  
 望みが叶いました。これからは、この地を知る者として一緒に護ってほしいのです」  
 「大変光栄です。エイルデイス様のお慈悲が、わたし達ダークエルフに道を示してくだ

「さいました。わたしの命に替えましても、聖なる泉を護る所存です」  
 「フワッ。そこまで気負うことはないわさ。それじゃあ、本浴びをしましょうか」  
 エイルデイスが全裸になって泉へ入ると、アルミアも撒いた。  
 「そ、その……お邪魔……します」  
 「フワッ。そんなに緊張しないで。誰かが来る心配もないから、楽にしているよ？」  
 「それは……わかっていますけど、でも、やっぱり少し、恥ずかしいです……」  
 「あら、どうして？」  
 顔のなかほどまで水に浸かったエイルデイスが小首を傾げた。その拍子に、胸圍106センチの豊満な乳房がクワンと揺れる。  
 「一方、胸圍センチの娘は、わずかに頬を染めて俯いてしまう。  
 「うう……。あ、あまり裸を見せるのは……慣れてませんので……」  
 面を分けた母親じやないの。ほら、もつとよく身体を見せて。  
 「恥じらうアルミアは、船170を超えている。とはいえ、長命のエルフ族では、まだまだ少女ともいえる年齢である。アルミアの大きな胸も、未だ成長途中。いずれは母親のようにならねばならないわね。さあ、お母様は、肌艶もとってもきれいで、とても綺麗よ」  
 「そんなこと……お母様に比べたら、わたしなんて全然……」



「何を言ってるの、あなたがそんな謙遜をしてたら溺れちゃうわね、ナル？」  
 いきなり話を振られたナルリスは「クス……」と微笑んだ。  
 「はい。姫様のお身体、本当に美しいです」  
 「ナ、ナルリスまで……。あう……」  
 「ナ、ナルリスまで……。あう……」  
 テレテ、ますます顔を赤くするアルミア。そのまま泉の中へ沈んでしまおうに俯く娘を見て、エイルデイスは話題を変えた。  
 「ねえ、ナルも一緒にどうかしら？ とつても気持ちいいわよ」  
 「いえ、わたしはおふたりをお護りする任務がありますから、畏れ多いことです」  
 「あ……。でも、誰も来ないなら、少しくらいは……」  
 素の性格をのぞかせたアルミアも促すが、ナルリスは小さく首を横に振る。  
 「万が……どういふことありますから……。お許しください」  
 「そう……」  
 酷く残念そうアルミアの様子にナルリスが胸を痛めていることは、傍目にもわかった。エイルデイスは、ふたりに助け舟を出す。  
 「そうね……。今度は、二人で一緒に入れる機会を作りましょう」  
 「そ、そんな……。わざわざ、そんなことをしていただくなくても……」  
 「あまり遠慮されるのも寂しいものよ？ アルミアも、あなたを慕っているのだから」  
 「は、はい。それは、その……。とても嬉しく……」

「言いかけるナルリスが、不意にハッとして背後を振り返った。  
 「ナルリス……。どうかした？」  
 「心配が……。何かさあ……」  
 表情を引き締めたナルリスは、目を凝まして周囲を警戒する。エルフ族の特徴である長い耳が、ビクビクと動いた。腰の後ろに下げた長剣の柄に、油断なく手を伸ばす。その時だった。ワールフに似た、顔の因縁が咆哮とともに茂みから飛びだしてくる。  
 「いけなっ、獣が!! お下がりでございっ! 姫様っ!! エイルデイス様っ!!」  
 「さあ、どうして？」  
 聖なる泉を護るアルミアめがけて突進する凶獣。ナルリスは、素早く抜いた剣を振る。凶獣の行く手を阻んだ。  
 「はあっ! ふんっ! せりやあつ!!」  
 一般のエルフ族と比べて筋力と体力に勝るダークエルフだが、他種族との比較で最大の特徴となるのは俊敏さである。流れるような、それこそ舞い踊るような優雅な歩調さで、凶獣の急所を的確に捉え、仕留める。  
 「ナルリスッ!!」  
 剣の跡である守護騎士の見事な立ちまわり、それを目の当たりにして我に返ったアルミアが、自らも戦おうと、急いで岸へ上がりとうとする。  
 「大丈夫です。姫様、おケガは？」



「キザマのような者が総様に触れるなど……！ 凶賊を差し向けたのも、キザマかつ！！」  
 「なっ！！ なんの話を……！！」  
 「聞つておいて、答えを聞こうともしないナルルースの御執事が続げざまに振り下される、手心など微塵もない明確な殺意の籠る刃が、容赦なく振り下された。その猛攻が、マン  
 トの人物の手から弾き飛ばす。  
 「うわっ！！」  
 「終わりだっ！！」

間髪を容れず、ナルルースの渾身の一撃が振り下ろされた。

インクウィルは、エルフとしては数少ない「男性」としてこの世に生を受けた。貴重な存在である「男」の誕生は王国を管理するハイエルフの高官連を喜ばせ、生まれた男子は皆、市井には出されずに、神聖な森の奥の神域で手厚く保護されることとなる。インクウィルも、当然その恩恵を受けるはずだった。

しかし、実際は違っていた。  
 インクウィルは、赤子の時からほかのエルフの男子とはどこか違っていた。まず、生まれた時から自然に備わっているべき魔力が、ほとんどなかった。さらには、歳を重ねるごとに、ほかのエルフの子よりも早く成長し、体つきもゴツゴツと強張ったものになっていた。そして何より、生まれつきのものであったが、エルフの特徴である耳がずっと短いま

まだだった。こうした体の差異を、高官連は当然のように、よしとしなかった。長命種として知られるエルフは、誰彼かまわず自由に子孫を残せるわけではない。古より厳格に管理された種族繁殖の掟があった。身体が成熟して子を授かることができる期間になった女性エルフは、ハイエルフ、一般のコモンエルフ、あるいはダイクエルフにかかわらず、広大な神域施設のなかにある「生命の祠」と呼ばれる場所へ赴くことになる。そこでハイエルフの神官が管理する儀式が行われ、祈りによって降りた神から新たな生命を授かることとなる。

儀式は神聖なものとして、その実態を知る者は一部のハイエルフしかいない。だから、ほかの種族が行う繁殖のための「交尾」は、誰かするものであり、エルフが行うことではない。と広く一般に信じられていた。みだりに肌を触れ合うことはもとより、性愛を求めたことは、非常に穢らわしい禁忌のものとされてきた。故に、種族繁殖の厳格な掟と相俟つて、多くのエルフ達は「男性」の存在自体を知らない。それはつまり、己れの持つ本来の性分……種の保存にかかわる本能に気づいていない、ということでもあった。

幼いインクウィルは、自分が貴重な「男」であることもよく知られぬまま、異端たる「耳なしの忌み子」として、森の外れへと捨てられた。それは王国からの放逐であり、繁殖の掟を守るために死刑を科せられたに等しい。  
 運よくインクウィルは、はぐれエルフに拾われ、その集落で育てられることとなった。けれど、そんな幸運も長くは続かなかった。しばらく歳月を重ねると、インクウィルはま

ますます成長し、エルフの時間感覚としては、それこそあつという間に、集落の大人達の背丈を追い越してしまつた。

そんな折、村の長老達が「耳なしの忌み子」の噂を口にし始める。インクウィルは「忌み子」なのではないか。そして、禁忌を犯しては災いが起こるのではないかと、幼い頃であればともかく、体の大きくなったインクウィルが嫌いだす、ある意味「凶悪な容姿」を懸念してのことだった。

庇つてくれる者もいないわけではなかったが、いつまでもこのうらというらられるほど、インクウィルは鈍くも固くもなかつた。結局、追われるように村を去り、王国民がほとんど誰も寄りつかない「深き森」と呼ばれる場所へ移るようになった。ひとり生きていくなかで、インクウィルは少しずつ自身のことを理解していく。物心ついてからエルフ族の女性しか見たことのないインクウィルは、耳だけなく体つきも村のエルフ達とは違つた。声の調子もすつと低く、顔の雰囲気も異なつていて、それは確かに「獣」が持つ特徴を想起させた。

森に住む獣達は、牡と牝に性別が分かれていて、インクウィルの特徴は、獣の牡が持つそれと合致していた。とはいえ村のエルフ達は、エルフの牡……すなわち男性の存在を知らない。獣は交尾をして子孫を残すが、エルフは祈りの儀式によって産まれるとされ、それを信じていた。だからインクウィルを「獣造り」と恐れられたのである。いずれにしてもインクウィルは「耳なし」である自分には出来損ないのエルフなのだと思え

るようになっていった。なぜ自分だけがそうなのか、答えてくれる者がいるはずもなく、自らの体を呪いながら孤独な日々を過ごしていた。

ダイクエルフの渾身の一撃を喰らつてしまつた。そして、誤解からダイクエルフの渾身の一撃を喰らつてしまつた。体に冷たい感覚が疾り抜け、しだいに薄れていく意識のなか、インクウィルは強くとたまたま生きた。誰の邪魔をするでもなく、ひとりじつと耐えてきた。そんな自分が、たまたま他人を助けようとしただけなのに、殺される。こんな理不尽があるのか、と、嫌だ。死にたくくない……。このまま死んで堪るか……！！

「う……む……」  
 心臓が破裂し、体内から熱い血潮が噴き出したような感覚に、インクウィルはハッと眼を開ける。ぼやけた視界の中に、とんが帽子を被つたエルフの顔が見えた。  
 「よかつた、気がつかれましたか……。もう少し寝ていてください。まだ傷が癒えがきつていませんから」

「傷……？ うっ、く……。 あんたは……？ こは……、ど……ど……？」  
 「あ、ご挨拶がまだできていたインクウィルの身を優しく摩り、エルフが微笑む。  
 「あなた、挨拶がまだできていたインクウィルは自ら「魔女」と呼ぶが、王国においては「魔女」とは道

デインランドを名乗るエルフは自ら「魔女」と呼ぶが、王国においては「魔女」とは道

を踏み外した魔導師への罵詈雑言である。わざわざ自分から口にするものではない。自虐的とも思える言葉だった。イングウィルも似たような立場だけに、敵えてそのことに触れはしなかった。

「ここは、わたしの住処ですわ。悪魔の採取に森へ行ったのですが、そこで偶然あなたの方の姿を見つけて……悪魔の採取……」

「そうか……。俺は、あの時……」

「イングウィル、祈りつけられてから先の記憶はないが、どうやらまだ生きています。心臓も破裂していません。とはいえ、まだ体に力が入りません。自由のきかない身を指すって視界を遮らせると、滞留の中と思いき場所が仰向けに横たわっているのがわかった。あんた……。イングウィル……。どうしたか……。見ていたのか……」

「ええ、止めに入る間もなかつたので、そこは申し訳ありませんでしたが……。処置はすぐしましたから、大きな傷が残ることはないと思いますが……。念のため……」

「イングウィルは何やら印を結び、どこからともなく小さなリングを取りだす。これは「生命の世の指輪」というものです。樹木の蔭で作られたような意匠の指輪は、何か魔力が込められているのか、キラリと強く煌めいていた。

「ハイエルフの秘伝とされている「生命の樹」から作り出した指輪……。着けた者の生命



力を増幅させる効果があるのです。それでは……失礼いたします」

「イングウィルは指輪をイングウィルの右人差し指にはめていく。輪の中にスルスルと指が滑り込んでいく。指輪はまるで根を張るかのように絡みつき、そのままスッと指根へ飲み込むように消えてしまった。

「見えなくなるのか？」

「はい。万が一にも、盗まれたりしては大変ですから……。フフ……」

「イングウィルが小さく溜息、目を細めて妖しく笑う。その後……」

「んむ……!! これは……。んく……!!」

突然、頭をつんざくような耳鳴りとともに、イングウィルの視界が暗くなる。ドクンと心臓が高鳴り、体が熱を帯びていくように感じられた。まだ少し残っていた傷の痛みも薄れ、斬られた場所がどこだったかすらわからなく

なっている。

「ほどなくして、視界は明るさを取り戻した……。ところで、お名前を伺ってもいい？」

「あれで、ちゃんと指輪は装着されました……。あ……。ああ、そうだったな。すまない。俺の名は、イングウィル……。まあ、名前など、さして使うこともないがな」

「イングウィル……。さん、よい響きでいらつしやいます。どうぞお見知りおきください」

「そう言くと、イングウィルがイングウィルの体をしげしげ眺める。そのまぶたを閉じて、あんなに綺麗な指輪が、イングウィルの体を鎖骨から下へと伝わるように這っていく。そのまま、斬られた場所より下の、下腹部へと通り行く。そこは、あんなに鮮やかな色に感じられた場所でもあった。

「こんな不格好な体の何が喜ぶものか、そもそも、どうして俺なんかを助けたんだ？」

「あら……。自分の体は、好きではありませんか？」

「見ればわかるだろう？（腹巻き）として扱われたこの身、好きになれるものかよ」

「フフ……。（腹巻き）なんて、とんでもない。こんなに嬉しい体を、このように卑下することはありませんわ」

「皮肉を言われたのかと思いき、イングウィルは鼻で笑う。

「フン……。嬉しい？ ダークエルフじゃあるまいし……」

「いえいえ、この強い骨格……。ダークエルフとも比べ物になりません。あなたは、素晴らしい（ニンゲン）ですよ」

「ニヤリと笑みを浮かべるイングウィル。イングウィルは思わず問い質した。

「あなた、（ニンゲン）って言ったな。（ニンゲン）とは、なんだ？」

「もちろん、あなたのことですわ。あなたは、「自身のことをエルフの出来損ないだ」と、そう思っているしやしません……。でも、違います。あなたは耳の短いエルフではなく、本来（ニンゲン）と呼ばれる種族なのです。この世界は、エルフだけのものではありません。姿形は似ていても、本質の異なる種族が存在します。ニンゲンの男も、そうです」

「待て待て……。今（オトコ）と、言ったか？」

「その単語は、イングウィルも少し耳にハイエルフの神官から聞かされた記憶が、うっすらと残っている。もともと、それ以降は一度も耳にしたことがなかった。

「はい、そう申し上げました。あなたはニンゲン（男）……。間違いないですね」

「イングウィル……。初めて知ったばかりの、このエルフは、イングウィル自身すら知らないことを、いろいろ知っているようだよ。いったい、彼女は何者なのか？ イングウィルには訊きたいことばかりである。とはいえ、まっ先に口を衝いて出たのは、先刻来すつと気になっていたことだった。

「どこで……。さつきから何をしているんだ？」